

精神分析のはなし 第5話

インタビュアー：子どもが話すことば（ラング）とは何でしょうか？それは一般のことばとは違うようですが。

JAM：私たちが話すことば（ラング）は、とても変です。語源についてことば（ラング）を考えてみる場合は、言い換えるなら、私たちが用いている語がどこから来たのかをひとが考慮するときは、とっぴさが刻まれているようでさえあります。

たとえば、変だ *bizarre* という語です。どこから来ているでしょうか。スペイン語からです。古典時代にその語はやってきました。アンリ4世、ルイ13世、14世。その時代、フランス人はとてもスペイン人に嫉妬していました。強力だったからです。ちょっと今日のアメリカ人みたいなものです。そしてスペインは当時とりわけ、変なものとして現れています。パスカルがある国の真理、またべつのある国の真理という、真理のバリエーションを示すために、スペインを引き合いに出しているのをあなたはたぶん思い出ででしょう。真理はピレネー山脈を越えると逆さまになると[ピレネー山脈のこちら側の真理は、あちら側では誤り、『パンセ』]。

いずれにせよ *bizarre* はスペインからやって来て、それは勇敢な *vaillant* とか、勇気のある *courageux* を意味していました。それでは *bizarre* はどのようにスペインにやってきたのでしょうか。フランス語の辞書を調べてみても、よくは分かっていません。バスク語からなのか、それともアラブ語からなのか。バスク語からかも知れません、それは髭 *barbe* を意味する *bizarra* だったかもしれません。それは複合語だったのかもしれないトリトレ辞典は言っています。それは *biz* と *harra* である、と。それが意味するのは、「ひとりの男であれ」だということです。それは美しくないでしょうか？どうですか。

しかしアラブ語からもあり得ると言います。*bachurette*、これは美、エレガンスを意味することです。そこから勇敢な *vaillant*、騎士の *chevarelique* が来ていて、もちろん、ですから怒りっぽい *colérique*、すぐにかつとなる *emporté*、逸脱した *extravagant* が来ています。そしていまの私たちにいたります。

すべて成り立ちます。すべて意味を作っています。しかしまさに、どんな意味さえも作りだしています。そして語源というのはいつも軌道を逸するくらいに説得力のあるもので、あらゆる由来・源泉もまたおなじです。

より面白いものをみてみましょう。「変な *bizarre*」という語を一度でもフランス語の辞書で

調べてみたら、つぎはスペイン語の辞書を見てごらんなさい。常用語のスペイン語辞書です。今日スペイン人がスペインで話しているものの辞書を、です。それはもう、本当に滑稽きわまりないです。Bizarro という語は相変わらず存在していて、使われてもいます。しかし、勇敢な、という意味は、廃れてしまっています。もう bizarro という語は、軍人来形容するために、それもユーモラスな意味でしか、使われていません。

しかし気をつけてください、まだ話は終わっていません。この語はスペイン語でまだ使われていますが、軌道を逸した extravagant とか、驚きの surprenant という意味で、です。つまりフランス語の辞書が言っているような意味で、使われているのです。言い方を変えるなら、語が回遊しているのがわかりますよね。Bizarro は、勇敢な vaillant という意味をともなってスペインから私たちにやってきましたが、私たちはいわば軌道を逸した extravagant、不規則的な irrégulier という意味をスペイン語にお返ししたのです。哀れな、「変」 bizarre です。私にはもうそれがフランス語なのかスペイン語なのかわかりません。

よろしい。この語の回遊、語の突飛さは辞書のすべてのページに見られるものです。そして辞書がことば（ラング）の規範を作っても無駄です。辞書はつねに、特異的に変な本です。いつことば（ラング）の辞書をひとは調べるでしょうか。あなたが調べるのは、自身にとつてすこしそれが意味が分からぬ語であるときです。そういうことが起こる場合、ふたつの解決法があります。辞書を調べて、辞書から他の人たちにとってそれがどういう意味なのかを学ぶこと。それか、あなたが精神分析家のうちに行くことです。そこで、あなたは自分自身にとってその語がどういう意味をもつかを知る好機をもつのです。そのふたつは同じことではありません。

「変」にまつわる有名なセリフ、「変だと？あなたは変だと言いましたか」【マルセル・カルネ監督の映画『おかしなドラマ』に出てくるセリフ】によって、それはすべての語源を要約していますが、それは誤解の織物です。すべてのことば（ラング）はそのようにとらわれています。ひとが修辞学で言うように、ことばの綾の運動のなかに、つまり移動（置き換え）のあらゆる運動のなかに、すべてのことばはとらわれています。語の語源とは、誤解としての、ことば（パロール）のトレース（痕跡）です。誤解がことば（ラング）のなかに残す痕跡です。少しづつ、ひとが語源をたどるなら、すべての歴史＝物語が列を作り進みます。あるとき、またあるとき、すべての国民、あらゆることば（ラング）が、この語、あの語の由来を説明するために召喚されます。そして最終的には少しづつすべての知が召喚されるのです。

もちろん、ことば（ラング）は規則性を含んでいます。しかし、ことば（ラング）は、根本的に気まぐれな、軌道を逸した、そそかしい不規則性で織られてもいます。今日、ひとは言語（ランガージュ）からひとつの器官を作っています。しかし、言語に、自然なものはなにもありません。言語とは歴史的なもので一相互に、です一、言語はあまりにも自然なものがなさすぎて、超自然的であると考えるほうがよいほどです。「はじめにことばがあった」というパロールがあるように、です。

あるいはまた、ひとは言語を「学習」apprentissageの結果とみなします。たしかに、学習はあります。あなたがほかのみんなと同じように話すことを学ぶときには、学習があるでしょう。それが意味がある限り、ですが。しかし、もしあなたが、ほかのみんなと同じように話すことを学ぶ必要があるのは、まさに、あなたの最初の運動、本当に最初の運動—あなたがほんとうに小さかったときの一が、ほかのひとが話しているようなことば（ラング）を話すのとは、まったく違ったからなのです。つまりそれは、ほかのひとのことばを使って、あなたはあなた自身のことば（ラング）を、器用にこしらえるということなのです。

それを理解するのには、小さい子どもの発達を追うだけで充分です。子どもは自分のために自身のことばを作っています。いわゆる、特別なことば（ラング）です。そしてそのことばがあらゆる誤解にさらされる準備が整っているのを見るだけで充分です。まさにそれらの誤解こそが、ラングに意味の効果をもたらしているのです。

昔わたしは孫娘を観察しました。わたしの娘の娘です。彼女が1歳半のときに—現在彼女はもうすぐ10歳になります、先月、彼女はオペラ歌手ショーごっこをして遊んでいました、（笑）一。よろしい。当時1歳半のシルヴィアは、わたしが見つけたことですが、100くらいの語彙を持っていました。本当のことを言えば、おそらくそれ以上だったでしょうけど、わたしはつねに彼女と一緒に生活していたわけではないので・・。バカンスのあいだだけ、わたしは記録していたのです。単音節と2音節の100語くらいで、それらは作られていました。正常な発声のことばと言われるものと比べると、いわば語の一部を削除した形の語からも、作られていました。つまり、彼女は自身の興味にしたがって、ことばをこしらえていたのです。

たとえば、彼女は行く bas という語をもっていましたが、腕 bras を振り上げながらそれを発音していました。そして腕を振り上げることは、彼女にとって他者の腕によって抱えられたいという気持ちを意味していました。彼女の基本的関心はそれだったのです。tête という語は、頭を意味してはいませんでした。そうではなくて、乳房 tétine を意味していました。

た。乳房という語は、ふつう使われるようすに、よくあるようすに、ある時期の食物摂取の満足を、サンブランによる満足で置き換えていました。

それから彼女は、自分で自身の名前をこしらえました。もちろんいま彼女はそんなことすべてを忘れてますよ。彼女は自分に与えられた名前は気に入らないようすで、彼女はたったひとりで自分の名前をこしらえたのですが、まさに、このたったひとりで、*toute seule* という表現から、こしらえたのです。彼女にたいしてひとが「あなたはたったひとりでなんとうまくやっているんだろう」と言ったことがあるに違いないと、あなたは想定するかもしませんが。いずれにせよ、彼女の両親によると、彼女はたったひとりで *toute seule*（トゥット・スル）を、「タト」、に、改変したとのことです。そして彼女は自分を「タト」として、指し示したそうです。彼女はよく勝ち誇ったような様子で、その名前を発音していたそうです。

よろしい。彼女がわたし *moi* という語の使用を発見したときですら、彼女は「タト」と言って自分を指さしていたとのこと。まったく両親が与えた名前ではありませんでした。そして最終的に彼女は強い歓喜とともに、3つの音節をもつ語を発見したのです。とりわけ驚かせられたのは、直接的な彼女の関心事に、それが関わっていないということです。わたしは3つの音節をもつ最初の語を思い出せるのですが、彼女が歓喜しながら言っているのを聞いたからです。それは、恐竜 *dinosaur*、という語でした。そして彼女はそれが3音節であると知っているという印象をもちました。つまりそれは彼女がいつも口にしていた語より、長いものでした。

そして3音節語のうち二番目に発せられた語は、もしわたしの記憶が正しければですが…、最小限の *minuscule* という語でした。彼女はやはり知っていました。その語を発音するのは離れ業である、と。したがって、語には特別な享楽が結びついていました。乳房やおしゃぶりとかの享楽があたえられるものとはまったくべつのものです。あるいは両腕があなたをとらえたり持ち上げたりするときに起こる享楽とはまったくべつのものでした。

そうですね。ひとはわたしたちにあちこちで、脳科学は精神分析を有効期限ぎれにするだろうと説明します。いいえ、その逆です。金融のちからで、何百万ドルという予算のちからで、そして、いまは同じくらいのユーロでしょうか—なぜならヨーロッパでもやっていることですからー、ひとは基礎的なものごとを検証しあじめたところです。たとえば何年ものあいだ経済的支援をうけた研究で、ひとつの結論がでました。それは以下です。子どもを知的にするためには、Words are the way、語、それはひとつの方法である、と。脳の発達について、

語のもつ驚くべきインパクトが、確証されたのです。さきに説明したように、語は、ある注意深い、協力的な人間から、到来しなければならない、ということです。

それからニューロンの組織の発達ですら、注意深い人間存在から子どもに向けられたことばに、依っているということです。それこそ、マインド mind、精神 esprit を形成するものです。以上が、そうです、何百万ドルに値するものです。すくなくともこの点について、脳科学というものはことば（パロール）の機能と言語の領野の重要性を確証したと言うことができるでしょう。とりわけ精神分析ではラカンがそうしたわけですが。

ジャン=ピエール・シャンジュが「ニューロン人間」と呼ぶものは一かつて、ジャン=ピエール・シャンジュと対談した際に、わたしがその呼称を発明したと言わなければなりませんが一、ニューロン人間は、ニューロン人間になるために、言語の湯船が必要です。それは小さな孫娘において観察されたように、学習なのでしょうか。そしてその学習は、原始的な活動なのでしょうか。いいえ、ちがいます。それは遊びです。それは楽しいものです。まさにそこで、ひとは、ラカンの機知の価値を理解するというものです。彼は言っていました。「享楽は、とどのつまり、意味を享樂する *jouis-sens*、享樂された意味 *sens joui* である」と。この享樂された意味とは、子どもの言語の遊びのなかで、疑う余地のないものです。そして享樂された意味、も、まさに然りです。それは良識とはなんの関係もありません、むしろその反対です。その享樂された意味は、変な意味のことです。それは恐竜 *dinosaure* で、なんの役にも立たないものです。それを発音することができることを示す以外には、なんの役にも立ちません。